
雨の中で

旅がらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中で

【コード】

N5560B

【作者名】

旅がらす

【あらすじ】

雨が降ってきた。君は雨が降っていることに気づくと、何故か外に飛び出したんだ。

あの日、僕は僕の部屋で映画を見ていた。

本当は、君が前から気にしていた、ちょっとお洒落な雑貨屋に行く予定だったんだけど、ネットで調べたところ、今日は定休日だったんだ。

「せっかく、平日に休みができたのにね」

と、君は残念そうに舌をちよつとだけ出した。

そして今、僕は僕の部屋の中で、君のお気に入りの洋画を見ている。小さな男の子が1人で家にあるものをフルに使い、悪者たちを面白おかしくやつつけていくその映画は、僕も見飽きないので、すごく好きだ。

悪者の1人がドアを開けた途端、火炎放射器で頭を燃やされるところで、僕は腹を抱えて大笑いした。

「あれは熱いね！」

「熱いどころじゃないだろ。普通はヤバいって」

僕は床に転がって笑いあった。

ふと、君と目が合った。僕は笑うのをやめて、互いに見つめ合った。どのくらいそうしていたのだろう。君が突然小さく吹き出した。

「な、なんだよ、いきなり」

「だって……、真剣な顔するんだもん」

僕は少しムツとした。いくらなんでもちょっと酷い。
僕の視線に気づいた君は、

「ごめんごめん」
と手を合わせた。

それから、臆面もなく僕に囁くように君は言った。

「でも、そう言う貴方も好きよ」

突然の君の言葉に、不覚にも僕は顔を真っ赤にしてしまった。君は僕を見て、

「顔真っ赤。可愛い」

と、はにかんだ。

僕は、（可愛いのはお前の方だろ！）と心の中で悪態をつきながら、テレビに視線を戻した。

雨粒が部屋の窓を叩いたのは、映画が終わったところだった。
最初に気づいたのは、君のほう。

「あ。雨だ……」

君は立ち上がり、窓に駆け寄った。そして、何を考えたのか、窓を全開にしたんだ。

もちろん、僕は目を丸くして驚いた。慌てて窓を閉める。

「あ、閉めちゃった」「いや、開ける方がおかしいだろ？ 部屋が湿気るじゃんか」

僕が抗議すると、君はほっぺたをぷくつと膨らませた。まるで、ハムスターみたいだ。

「いいじゃん。後で除湿機かければ。それよりも、良い匂いにするよ」

君はそう言って再び窓を全開にした。でも、また僕は窓を閉めた。生憎だけど、貧乏学生の僕の部屋には、除湿機という文明の利器は存在しないんだ。

それを説明すると君は、それじゃあ……。と玄関に行つて靴を履き始めた。

「ちょっと散歩してくるね」

君は、傘も持たずに外に飛び出した。僕は慌てて、一番大きなこもり傘を手にして君を追いかけた。

雨は霧雨で、傘に当たると、昔ばあちゃんの田舎でよく聞いた、小川の流れる音によく似た音を奏でた。

君は、僕のアパートのすぐ近くにある公園で、ブランコに乗って遊んでいた。

僕は傘を差してやろうと君の方に向かった。でも、途中で足が動かなくなつた。

君の歌声が聞こえたんだ。

それは、僕も君もすごく好きな歌で、よく2人で口ずさんでいた歌だった。

君は雨に濡れながら、綺麗な声で歌っていた。

僕は、その場に立ち尽くしていた。傘が足下に落ちたことも気がつかなかった。

だって、雨を着た君が、すごく綺麗に見えたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560b/>

雨の中で

2011年10月3日19時23分発行